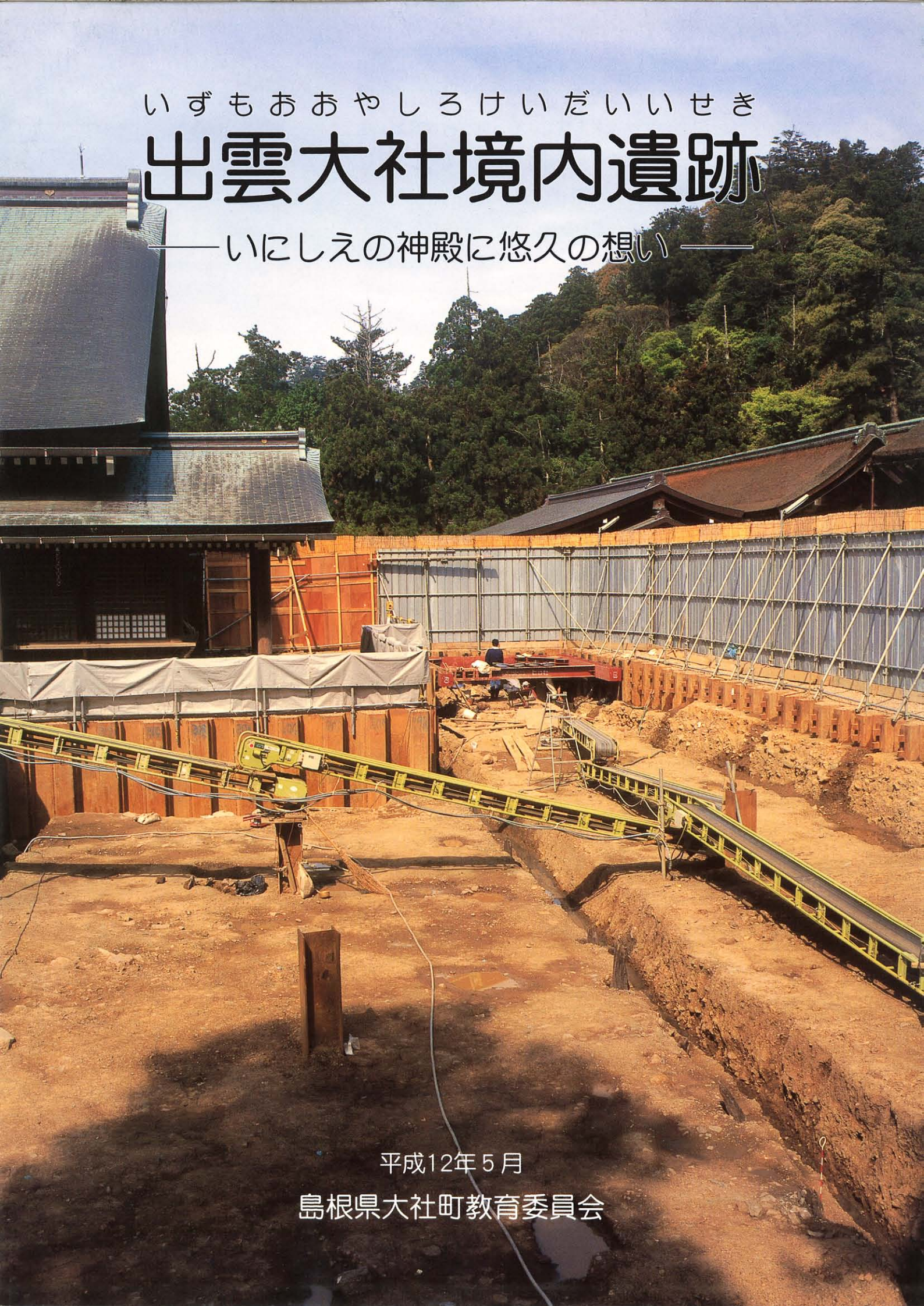
いずもおおやしろけいだいいせき

出雲大社境内遺跡

――いにしえの神殿に悠久の想い――



平成12年５月

島根県大社町教育委員会

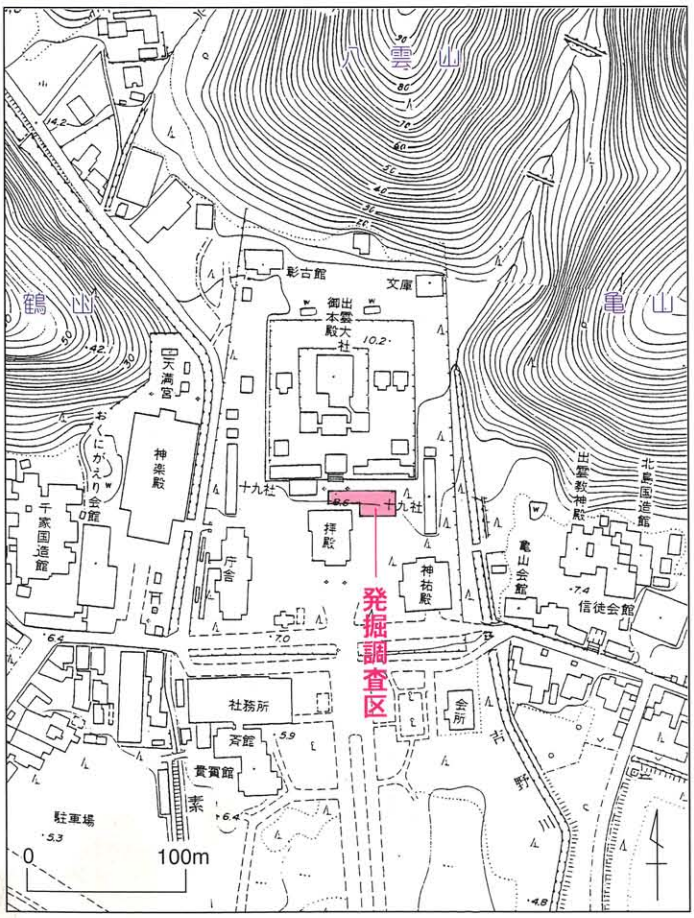
発見の意義

日本の建築史や宗教史解明の手がかりとなるだけでなく、国家の成り立ちや変遷の中で出雲大社が果たした歴史的意義を検証する上でも極めて重要となる成果が期待できます。

そして、出雲大社に残されている豊富な文献資料と発掘調査で発見された境内遺構とを直接検討することが可能となりました。このように長期間にわたる文献資料と考古資料が対比できる事例は極めてまれです。また、大規模な柱の発見により、これまで否定的な意見もあった『金輪御造営差図』にある大規模本殿について、学術的な検討が可能となりました。さらに、4世紀の祭祀遺跡の発見は、福岡県沖ノ島の祭祀遺跡の初現とほぼ同じであり、古代祭祀の歴史を解明するうえで重要です。

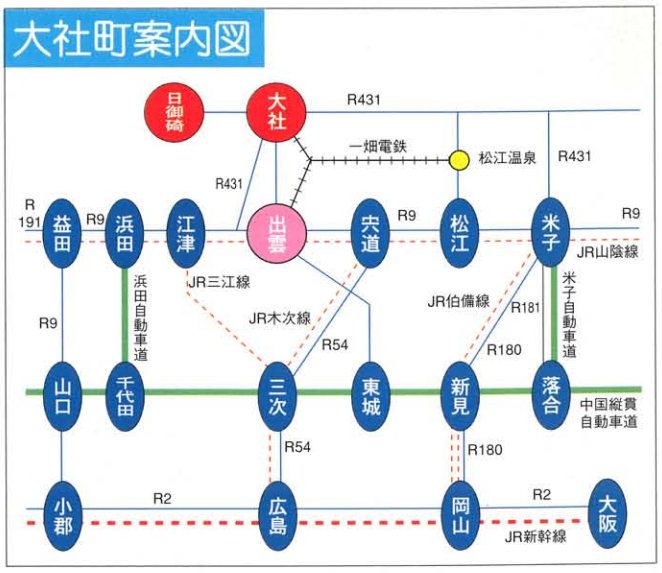
境内地ではこれまでに縄文晩期から江戸時代にわたる各時期の遺物が多数出土しており、出雲大社がこの地に成立した背景を考える上で大きな成果を得ることができました。

●境内周辺地形図



大社造営関係年表

年　代	記　事
659年(斉明5年)	出雲国造に命じて神宮を造らせる
970年(天禄元年)	「雲太・和二・京三」として東大寺大仏殿より高い建造物として見える(『口遊』)
987年(永延元年)	正殿式遷宮
1031年(長元4年)	出雲国杵築社転倒
1036年(長元9年)	正殿式遷宮
1061年(康平4年)	社殿転倒
1067年(治暦3年)	正殿式遷宮
1095年(嘉保2年)	出雲大社鳴動
1109年(天仁2年)	社殿が傾き転倒せんとする
1110年(天仁3年)	大社造営用の巨木百支が大社の西の稲佐浦に漂着
1114年(永久2年)	正殿式遷宮(寄木造営)
1141年(保延7年)	社殿転倒
1145年(久安元年)	正殿式遷宮
1172年(承安2年)	社殿転倒
1175年(安元元年)	仮殿式遷宮
1190年(建久元年)	正殿式遷宮 この頃寂蓮法師が参詣。山の半ばまで千木が見えたという(『寂蓮法師集』)
1225年(嘉禄元年)	社殿転倒(1235年の記述もある)
1227年(嘉禄3年)	仮殿式遷宮
1248年(宝治2年)	正殿式遷宮(出雲大社并神郷図)
1261年(弘長元年)	出雲国杵築社鳴動
1270年(文永7年)	杵築社火災。神体は焼失せず
1282年(弘安5年)	仮殿式遷宮
1325年(正中2年)	仮殿式遷宮
1386年(元中3年)	仮殿式遷宮
1412年(応永19年)	仮殿式遷宮
1442年(嘉吉2年)	仮殿式遷宮
1467年(応仁元年)	仮殿式遷宮
1486年(文明18年)	仮殿式遷宮
1519年(永正16年)	仮殿式遷宮
1550年(天文19年)	仮殿式遷宮
1580年(天正8年)	仮殿式遷宮
1609年(慶長14年)	仮殿式遷宮(杵築大社近郷絵図)
1667年(寛文7年)	正殿式遷宮(敷地大造成整備)
1744年(延享元年)	正殿式遷宮



出雲大社の社殿の変遷

出雲大社の起源について、『古事記』『日本書紀』は、大国主神（おおくにぬし）の国譲りの事績に対して天照大神（あまてらす）（天つ神）の命により、大国主神の神殿を高天原の神の宮殿と同じように、太い柱、厚い板をもって千木高く掲げて建造されたと伝えています。

このように出雲大社の社殿は、古くからその巨大性がとくに重要視されていたようです。事実、平安時代にはあまりに高い神殿のためか、幾度も神殿が転倒したという記録が残されています。

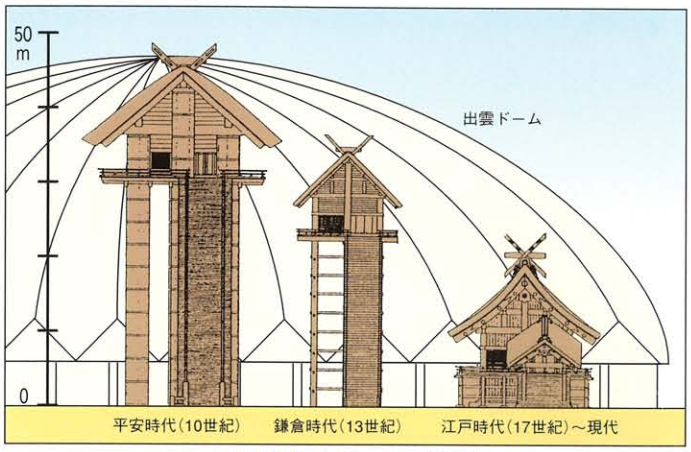
出雲大社の言い伝えには、上古には32丈（約96メートル）、中古には16丈（約48メートル）とあります。32丈は背後の八雲山を対象としたとすることもできますが、16丈は神殿の可能性が高く、今回検出された柱が相当するかもしれません。

この16丈の神殿の高さをあらわしたと思えるものに、平安時代の天禄元年（970）に源為憲（みなもとのためのり）がつくった貴族の子弟のためのテキストの『口遊（くちずさみ）』があります。この中には日本国中の建物の大きさのベスト３を記した記事がありますが、「雲太（うんた）・和二（わに）・京三（きょうさん）」として一番を出雲大社の神殿、二番を大和の東大寺大仏殿、三番を平安京大極殿（だいごくでん）としています。二番目の東大寺大仏殿は、当時高さ15丈ですので、それより大きいという出雲大社が16丈あっても不思議ではありません。

今一つ、具体的に巨大な神殿を伝えるものに、出雲国造千家家に伝わる『金輪御造営差図（かなわごぞうえいさしず）』があります。この図は古代（平安時代）の神殿を伝えるものといわれ、神殿は一辺が４丈（約12メートル）の平面正方形をし、各柱は３本の柱を鉄の輪で束（たば）ねて一本の柱としたもので、側柱でもその直径が１丈（約３メートル）と巨大で、正面の階段の長さは１町（約109メートル）と記されています。今回の発掘で、この『金輪御造営差図（かなわごぞうえいさしず）』に描かれた状況が、決して誇張されたものではないことが明らかにされつつあります。

巨大な神殿も中世以後にはその規模を縮小しましたが、江戸時代の前期には高さ24メートルの神殿となり、以後これを規範として現在に至っています。

出雲大社本殿復元模型（平安時代・10世紀）『古代出雲文化展』より



出雲大社本殿の高さ比較

出雲大社并神郷図　部分《鎌倉時代の境内》（千家尊祀氏所蔵）

杵築大社近郷絵図　部分《江戸時代初期の境内》（北島英孝氏所蔵）

遺跡調査の経過

出雲大社境内では、これまで防災工事等により、縄文時代晩期・弥生時代・古墳時代を経て、古代・中世と各時代にわたる遺物が出土しており、「出雲大社境内遺跡」として知られていました。

出雲大社による地下祭礼準備室の建設計画により、平成11年９月１日から建設予定地の発掘調査を実施したところ、出雲大社の長い信仰の歴史を物語る様々な遺構・遺物が検出されました。そしてこの遺跡については、出雲大社の格別のご理解により、現状保存して後世に伝えることが決定されました。

遺跡の概要

境内地下約0.5～1.5mより、平安時代後半頃から江戸時代初めごろまでの各時代の旧境内の様子や古墳時代前期（４世紀頃）の祭祀遺物等が検出されました。

その中でも今回出土した大規模な柱は、考古学・建築史・宗教史などあらゆる分野にわたって極めて重要な示唆を与える発見となりました。

これまでにわかったこと

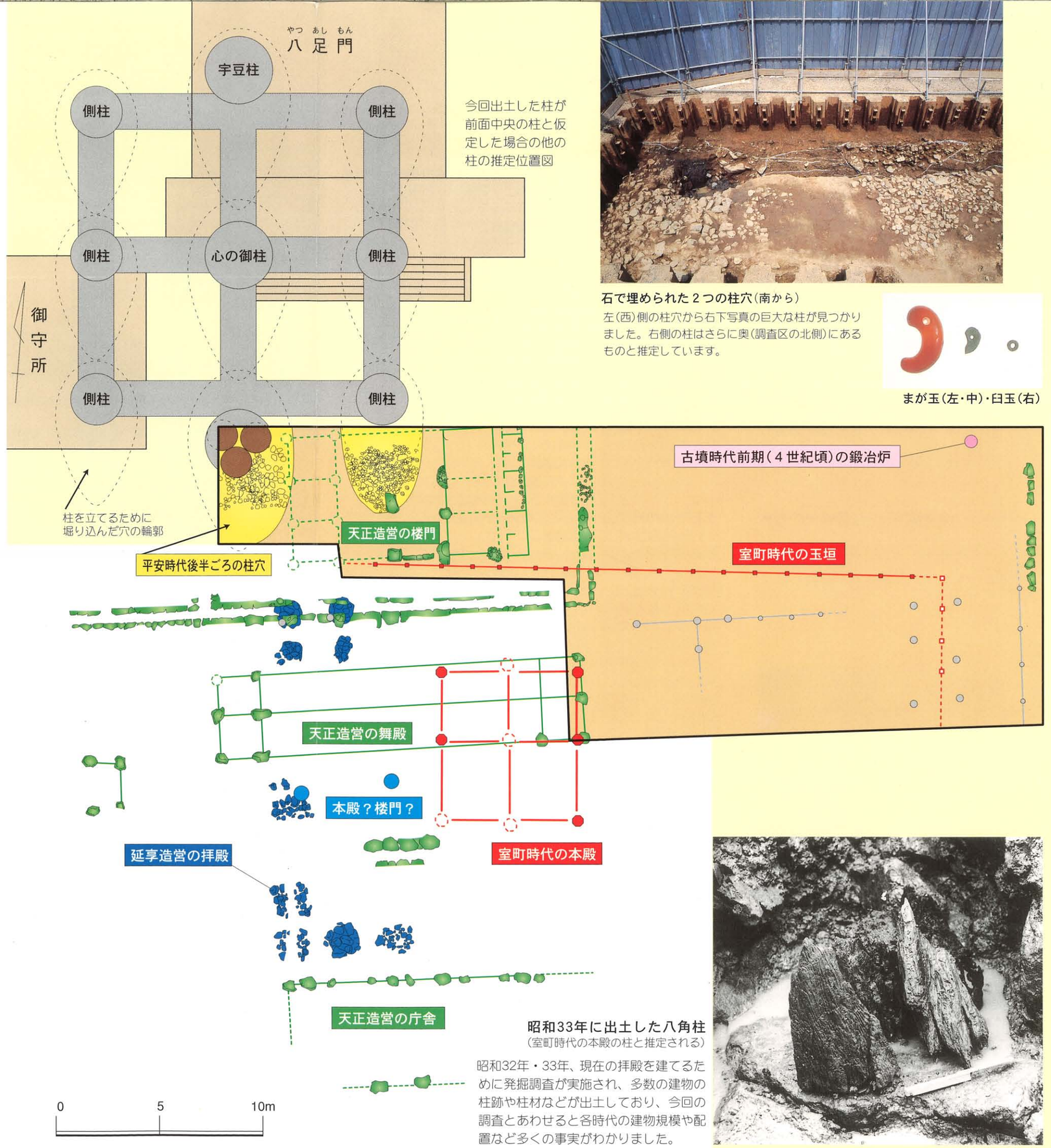
①江戸時代前半の大規模な造成土を確認しました。
寛文造営（1667年）または延享造営（1744年）のものと推定されます。

②戦国時代末から江戸時代初めごろの礎石建物跡・溝を確認しました。
天正８年（1580年）建立の楼門（ろうもん）、舞殿、庁舎（ちょうのや）などの境内建物跡と推定されます。

③室町時代から戦国時代の柱穴・柱材・礎盤などを確認しました。
本殿・玉垣などの建物跡と推定されます。

④平安時代後半（11世紀ごろ）の大規模な柱が発見されました。
本殿の柱の１つと推定され『金輪御造営差図（かなわごぞうえいさしず）』にみられるように、３本の柱を束ねたものと考えられます。

⑤古墳時代前期（４世紀ごろ）の土器群とともに、勾玉（まがたま）等の祭祀（さいし）遺物や炉跡・溝を確認しました。



石で埋められた２つの柱穴（南から）
左（西）側の柱穴から右下写真の巨大な柱が見つかりました。右側の柱はさらに奥（調査区の北側）にあるものと推定しています。

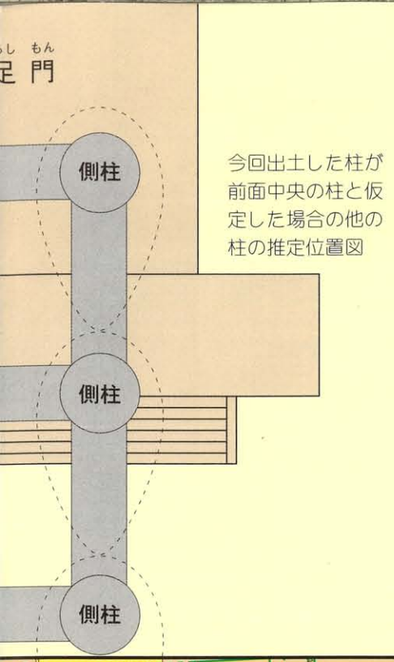
まが玉（左・中）・臼玉（右）

昭和33年に出土した八角柱
（室町時代の本殿の柱と推定される）

昭和32年・33年、現在の拝殿を建てるために発掘調査が実施され、多数の建物の柱跡や柱材などが出土しており、今回の調査とあわせると各時代の建物規模や配置など多くの事実がわかりました。

本殿の

出土した
最大で径135
この構造は『

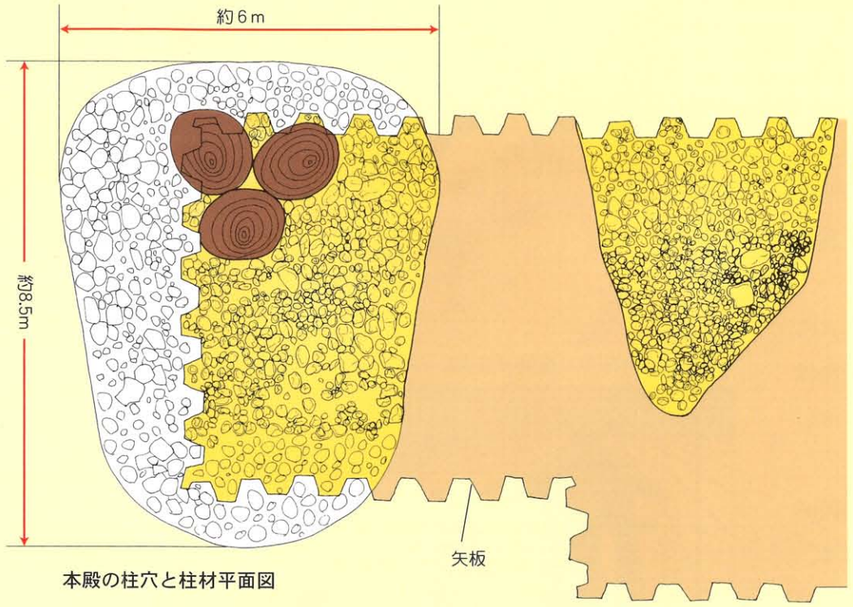


今回出土した柱が前面中央の柱と仮定した場合の他の柱の推定位置図

石で埋められた２つの柱穴（南から）

左（西）側の柱穴から右下写真の巨大な柱が見つかりました。右側の柱はさらに奥（調査区の北側）にあるものと推定しています。

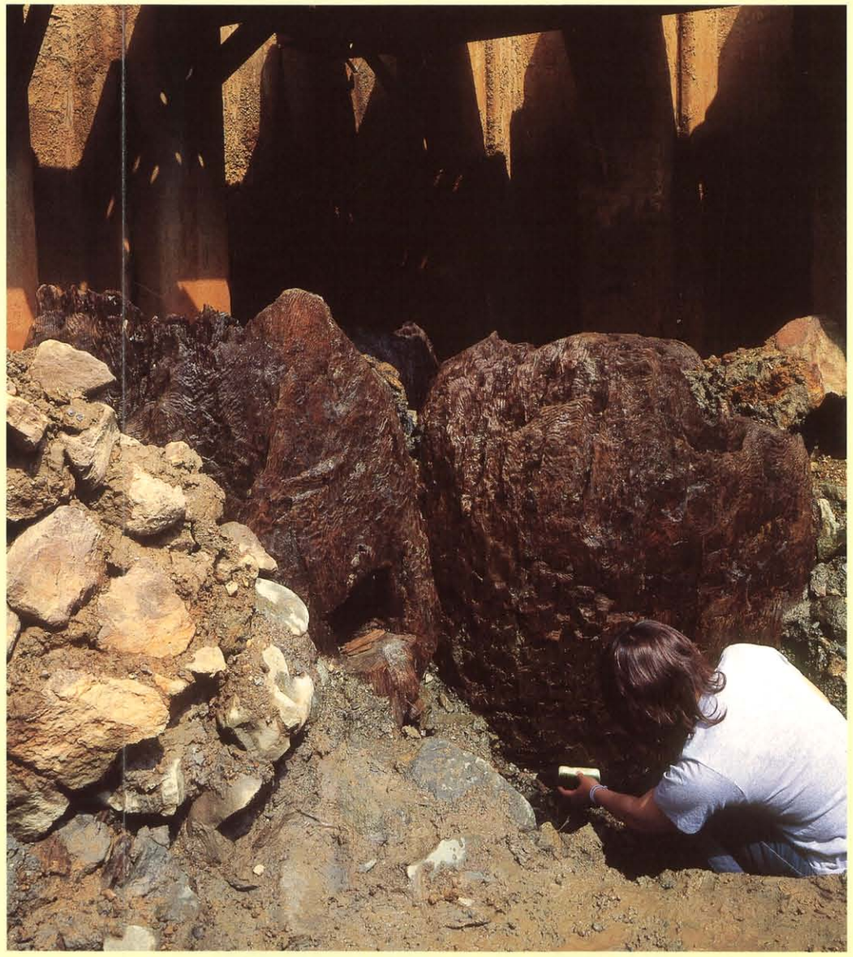
まが玉（左・中）・臼玉（右）



本殿の柱穴と柱材平面図

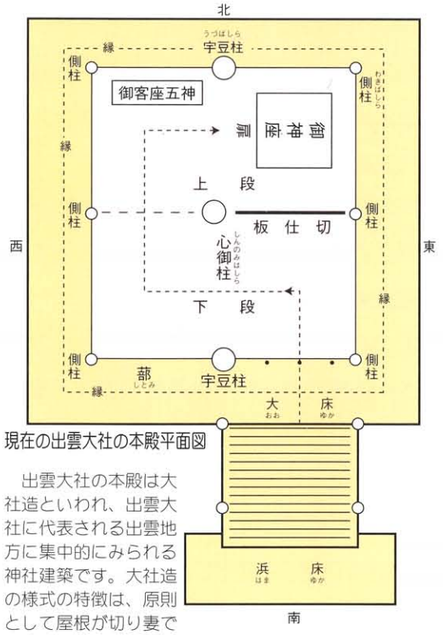
昭和33年に出土した八角柱
（室町時代の本殿の柱と推定される）

昭和32年・33年、現在の拝殿を建てるために発掘調査が実施され、多数の建物の柱跡や柱材などが出土しており、今回の調査とあわせると各時代の建物規模や配置など多くの事実がわかりました。



出土した柱材（南東から）

最大で径135cmの柱材３本がひとつにまとまって１本の柱（経約３m）をなしている。
この構造は『金輪御造営差図』（右図）の柱と同じものである。

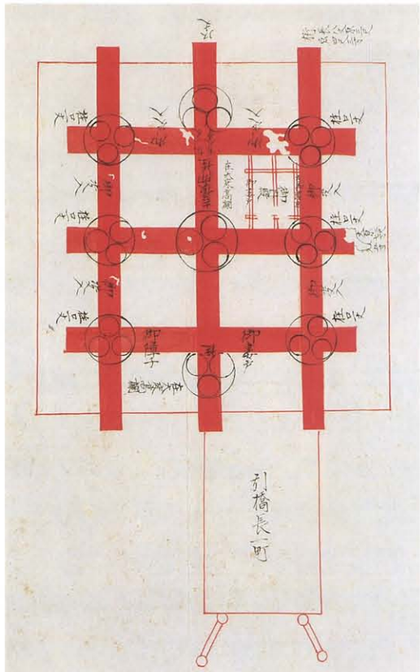


現在の出雲大社の本殿平面図

出雲大社の本殿は大社造といわれ、出雲大社に代表される出雲地方に集中的にみられる神社建築です。大社造の様式の特徴は、原則として屋根が切り妻でその妻側の一方に入口があり、柱立てが周囲の壁の柱間を二つずつにして平面を田の字状に区画するように全部で９本の柱をもって構成されるところにあります。

柱は、中心に「心の御柱（岩根御柱）」と呼ばれる柱を据えて、それを取り囲むように８本の柱があります。そのうち２本は両妻側の中央の「宇豆柱（棟持柱）」で、他は側柱となります。（心御柱・径109cm、宇豆柱・径87cm、側柱・径73cm）

柱の太さは、中心の心の御柱がもっとも太く、ついで宇豆柱が二番目に太く、宇豆柱は少しだけ外側に飛び出しています。今回、検出された柱は、神殿正面側のこの宇豆柱に相当するものと推定しています。また、この東側に神殿の東南隅の側柱と思われる作事の跡を検出していますが、木柱そのものは今回の調査区外にあるものと推定しています。



金輪御造営差図（千家尊祀氏所蔵）

出雲大社の社殿の変遷

出雲大社の起源について、『古事記』『日本書紀』は、大国主神の国譲りの事績に対して天照大神（天つ神）の命により、大国主神の神殿を高天原の神の宮殿と同じように、太い柱、厚い板をもって千木高く掲げて建造されたと伝えています。

このように出雲大社の社殿は、古くからその巨大性がとくに重要視されていたようです。事実、平安時代にはあまりに高い神殿のためか、幾度も神殿が転倒したという記録が残されています。

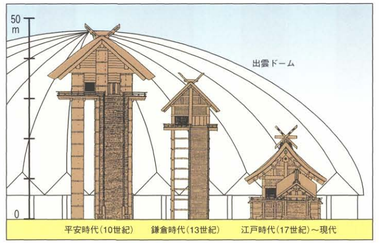
出雲大社の言い伝えには、上古には32丈（約96メートル）、中古には16丈（約48メートル）とあります。32丈は背後の八雲山を対象としたとすることもできますが、16丈は神殿の可能性が高く、今回検出された柱が相当するかもしれません。

この16丈の神殿の高さをあらわしたと思えるものに、平安時代の天禄元年（970）に源為憲がつくった貴族の子弟のためのテキストの『口遊』があります。この中には日本国中の建物の大きさのベスト３を記した記事がありますが、「雲太・和二・京三」として一番を出雲大社の神殿、二番を大和の東大寺大仏殿、三番を平安京大極殿としています。二番目の東大寺大仏殿は、当時高さ15丈ですので、それより大きいという出雲大社が16丈あっても不思議ではありません。

今一つ、具体的に巨大な神殿を伝えるものに、出雲国造千家家に伝わる『金輪御造営差図』があります。この図は古代（平安時代）の神殿を伝えるものといわれ、神殿は一辺が４丈（約12メートル）の平面正方形をし、各柱は３本の柱を鉄の輪で束ねて一本の柱としたもので、側柱でもその直径が１丈（約３メートル）と巨大で、正面の階段の長さは１町（約109メートル）と記されています。今回の発掘で、この『金輪御造営差図』に描かれた状況が、決して誇張されたものではないことが明らかにされつつあります。

巨大な神殿も中世以後にはその規模を縮小しましたが、江戸時代の前期には高さ24メートルの神殿となり、以後これを規範として現在に至っています。

出雲大社本殿復元模型（平安時代・10世紀）『古代出雲文化展』より



出雲大社本殿の高さ比較

出雲大社并神郷図 部分（鎌倉時代の境内）（千家尊紀氏所蔵）

杵築大社図郷絵図 部分（江戸時代初期の境内）（北島英孝氏所蔵）

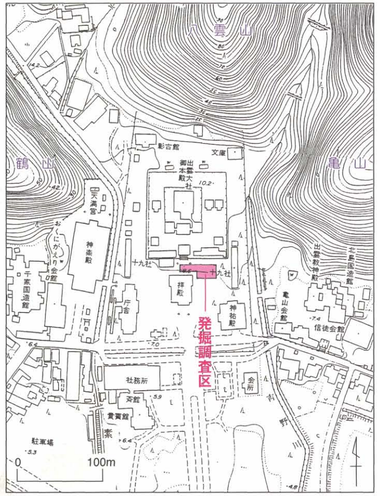
発見の意義

日本の建築史や宗教史解明の手がかりとなるだけでなく、国家の成り立ちや変遷の中で出雲大社が果たした歴史的意義を検証する上でも極めて重要となる成果が期待できます。

そして、出雲大社に残されている豊富な文献資料と発掘調査で発見された境内遺構とを直接検討することが可能となりました。このように長期間にわたる文献資料と考古資料が対比できる事例は極めてまれです。また、大規模な柱の発見により、これまで否定的な意見もあった『金輪御造営差図』にある大規模本殿について、学術的な検討が可能となりました。さらに、４世紀の祭祀遺跡の発見は、福岡県沖ノ島の祭祀遺跡の初現とほぼ同じであり、古代祭祀の歴史を解明するうえで重要です。

境内地ではこれまでに縄文晩期から江戸時代にわたる各時期の遺物が多数出土しており、出雲大社がこの地に成立した背景を考える上で大きな成果を得ることができました。

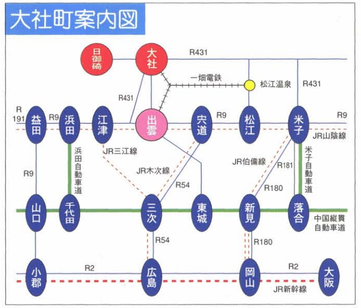
●境内周辺地形図



大社造営関係年表

年　代	記　事
659年（斉明５年）	出雲国造に命じて神宮を造らせる
970年（天禄元年）	「雲太・和二・京三」として東大寺大仏殿より高い建造物として見える（『口遊』）
987年（永延元年）	正殿式遷宮
1031年（長元４年）	出雲国杵築社転倒
1036年（長元９年）	正殿式遷宮
1061年（康平４年）	社殿転倒
1067年（治暦３年）	正殿式遷宮
1095年（嘉保２年）	出雲大社鳴動
1109年（天仁２年）	社殿が傾き転倒せんとする
1110年（天仁３年）	大社造営用の巨木百支が大社の西の稲佐浦に漂着
1114年（永久２年）	正殿式遷宮（寄木造営）
1141年（保延７年）	社殿転倒
1145年（久安元年）	正殿式遷宮
1172年（承安２年）	社殿転倒
1175年（安元元年）	仮殿式遷宮
1190年（建久元年）	正殿式遷宮 この頃叡蓮法師が参詣。山の半ばまで千木が見えたという（『叡蓮法師集』）
1225年（嘉禄元年）	社殿転倒（1235年の記述もある）
1227年（嘉禄３年）	仮殿式遷宮
1248年（宝治２年）	正殿式遷宮（出雲大社并神郷図）
1261年（弘長元年）	出雲国杵築社鳴動
1270年（文永７年）	杵築社火災。神体は焼失せず
1282年（弘安５年）	仮殿式遷宮
1325年（正中２年）	仮殿式遷宮
1386年（元中３年）	仮殿式遷宮
1412年（応永19年）	仮殿式遷宮
1442年（嘉吉２年）	仮殿式遷宮
1467年（応仁元年）	仮殿式遷宮
1486年（文明18年）	仮殿式遷宮
1519年（永正16年）	仮殿式遷宮
1550年（天文19年）	仮殿式遷宮
1580年（天正８年）	仮殿式遷宮
1609年（慶長14年）	仮殿式遷宮（杵築大社近郷絵図）
1667年（寛文７年）	正殿式遷宮（敷地大造成整備）
1744年（延享元年）	正殿式遷宮

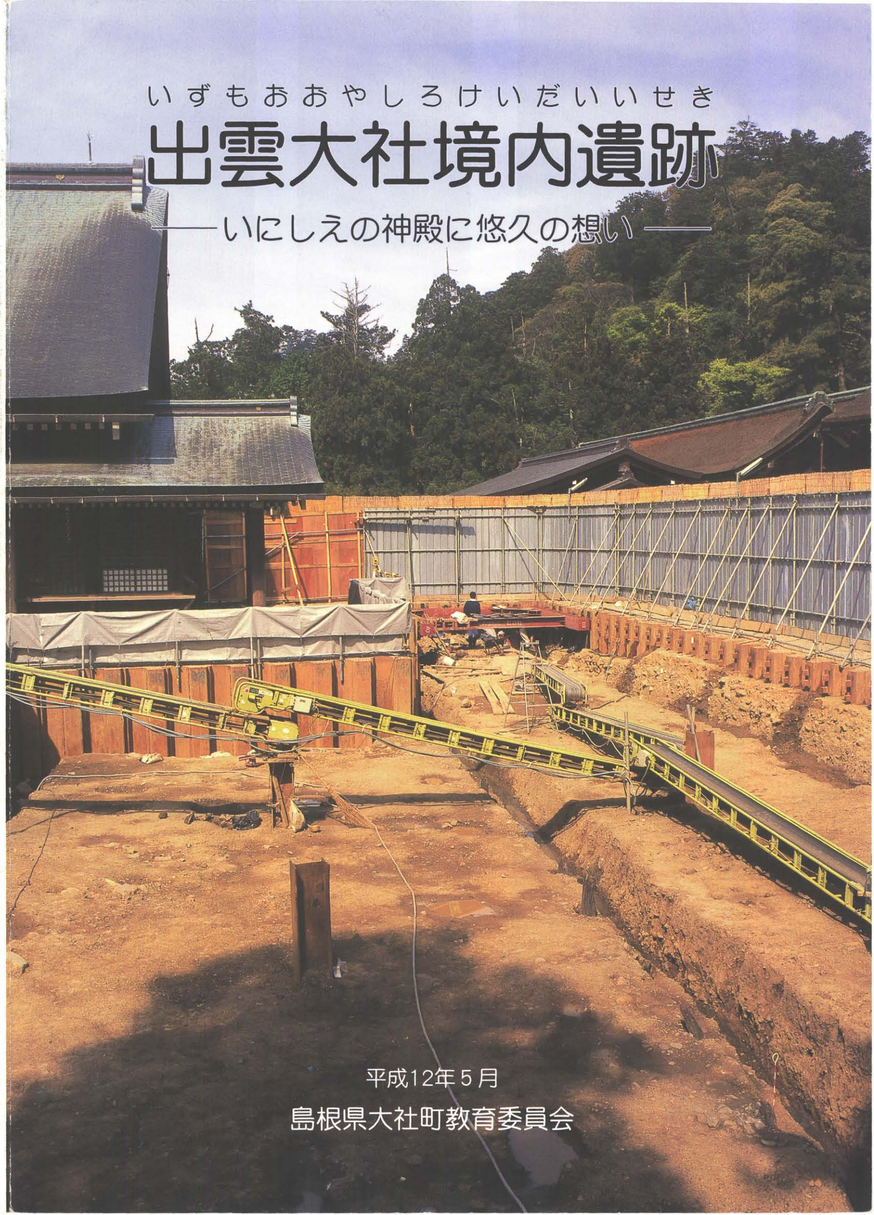
大社町案内図



いずもおおやしろけいだいいせき

出雲大社境内遺跡

――いにしえの神殿に悠久の想い――



平成12年５月

島根県大社町教育委員会

遺跡調査の経過

出雲大社境内では、これまで防災工事等により、縄文時代晩期・弥生時代・古墳時代を経て、古代・中世と各時代にわたる遺物が出土しており、「出雲大社境内遺跡」として知られていました。

出雲大社による地下祭礼準備室の建設計画により、平成11年９月１日から建設予定地の発掘調査を実施したところ、出雲大社の長い信仰の歴史を物語る様々な遺構・遺物が検出されました。そしてこの遺跡については、出雲大社の格別のご理解により、現状保存して後世に伝えることが決定されました。

遺跡の概要

境内地下約0.5～1.5mより、平安時代後半頃から江戸時代初めごろまでの各時代の旧境内の様子や古墳時代前期（４世紀頃）の祭祀遺物等が検出されました。

その中でも今回出土した大規模な柱は、考古学・建築史・宗教史などあらゆる分野にわたって極めて重要な示唆を与える発見となりました。

これまでにわかったこと

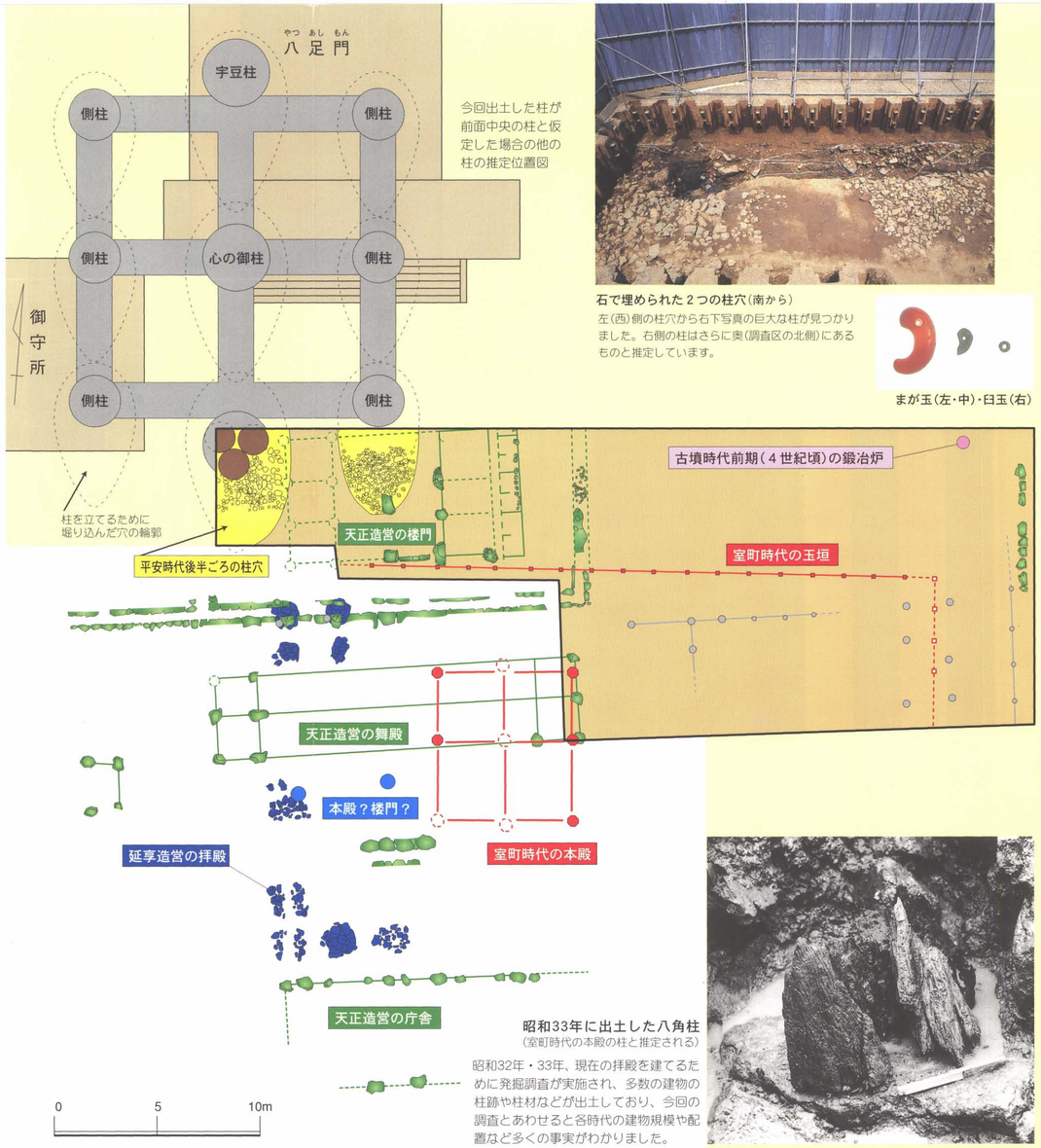
①江戸時代前半の大規模な造成土を確認しました。
寛文造営（1667年）または延享造営（1744年）のものと推定されます。

②戦国時代末から江戸時代初めごろの礎石建物跡・溝を確認しました。
天正８年（1580年）建立の楼門（ろうもん）、舞殿、庁舎（ちょうのや）などの境内建物跡と推定されます。

③室町時代から戦国時代の柱穴・柱材・礎盤などを確認しました。
本殿・玉垣などの建物跡と推定されます。

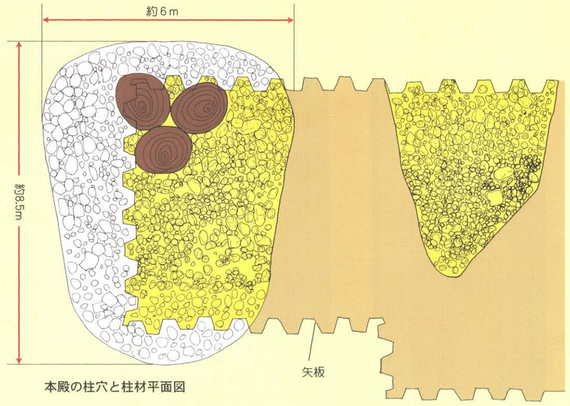
④平安時代後半（11世紀ごろ）の大規模な柱が発見されました。
本殿の柱の１つと推定され『金輪御造営差図（かなわごぞうえいさしず）』にみられるように、３本の柱を束ねたものと考えられます。

⑤古墳時代前期（４世紀ごろ）の土器群とともに、勾玉（まがたま）等の祭祀（さいし）遺物や炉跡・溝を確認しました。

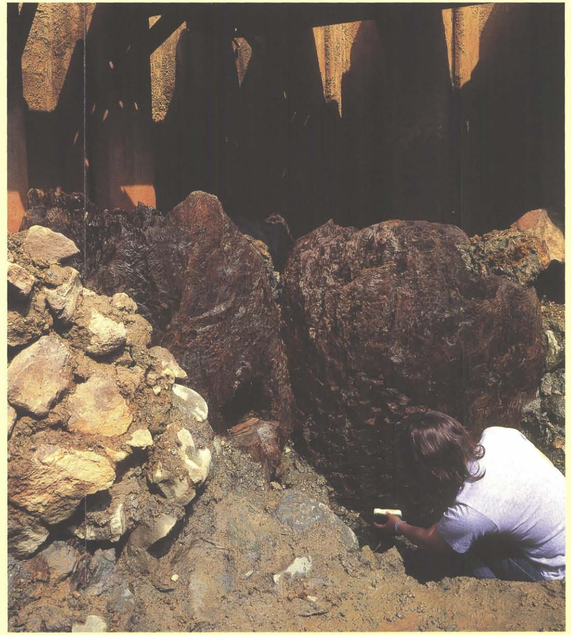


石で埋められた２つの柱穴（南から）
左（西）側の柱穴から右下写真の巨大な柱が見つかりました。右側の柱はさらに奥（調査区の北側）にあるものと推定しています。

まが玉（左・中）・臼玉（右）

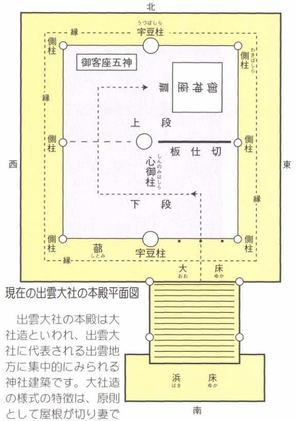


本殿の柱穴と柱材平面図



出土した柱材（南東から）
最大で径135cmの柱材３本がひとつにまとまって１本の柱（経約３m）をなしている。
この構造は『金輪御造営差図』（右図）の柱と同じものである。

昭和33年に出土した八角柱
（室町時代の本殿の柱と推定される）
昭和32年・33年、現在の拝殿を建てるために発掘調査が実施され、多数の建物の柱跡や柱材などが出土しており、今回の調査とあわせると各時代の建物規模や配置など多くの事実がわかりました。

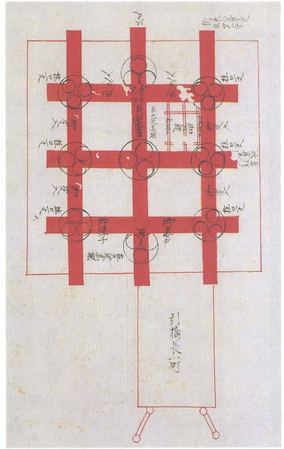


現在の出雲大社の本殿平面図

出雲大社の本殿は大社造といわれ、出雲大社に代表される出雲地方に集中的にみられる神社建築です。大社造の様式の特徴は、原則として屋根が切り妻でその妻側の一方に入口があり、柱立てが周囲の壁の柱間を二つずつにして平面を田の字状に区画するように全部で９本の柱をもって構成されるところにあります。

柱は、中心に「心の御柱（岩根御柱）」と呼ばれる柱を据えて、それを取り囲むように８本の柱があります。そのうち２本は両妻側の中央の「宇豆柱（棟持柱）」で、他は側柱となります。（心御柱・径109cm、宇豆柱・径87cm、側柱・径73cm）

柱の太さは、中心の心の御柱がもっとも太く、ついで宇豆柱が二番目に太く、宇豆柱は少しだけ外側に飛び出しています。今回、検出された柱は、神殿正面側のこの宇豆柱に相当するものと推定しています。また、この東側に神殿の東南隅の側柱と思われる作事の跡を検出していますが、木柱そのものは今回の調査区外にあるものと推定しています。



金輪御造営差図（千家尊紀氏所蔵）